



～多文化な子どもたちが共に活躍できる社会を目指して～

特定非営利活動法人 多文化共生センター東京 代表理事 朽木 典子

団体設立の経緯

多文化共生センター東京は、2001年に「多文化共生センター・東京21」として、前代表理事、若い事務局スタッフ、ボランティアにより外国にルーツを持つ子どもたちの教育を考え支援する団体として活動を始めました。当初、東京で同じように外国にルーツを持つ子どもたちをサポートする団体と共同で、中学3年生やその保護者を対象に進路ガイダンスの実施、また、東京都23区の公立学校における外国籍児童・生徒の現状を把握するため教育実態調査を行いました。その後、「日本語を学びたい」「高校へ進学したい」という子どもたちの学びへの思いを受け、ガイダンスに来た中学3年生を対象に土曜日の学習支援教室が始まりました。次第に日本語と教科を学べる場所があるという情報が広まり、教育相談に来る親子が増えてきました。中でも母国で中学校を卒業して来日した15歳以上の子どもたちは、日本の中学校には受け入れてもらえず、日本語を学ぶ場もなく高校進学への情報取得も難しい深刻な状況に置かれていました。こうした学齢超過の子どもたちに学びの場を保障するため、2005年、荒川区西日暮里の2DKのマンションで、毎日通え、日本語や教科を勉強できる「たぶんかフリースクール」がスタートしました。また、団体としては、2006年5月に法人格を取得し、以降、国籍・言語・文化の違いをお互いに尊重する多文化共生社会を目指し、外国にルーツを持つ子どもたちのための教育事業、ファミリーサポート事業、多文化共生のための情報提供事業などの活動を行っています。

多文化共生センターの活動 外国にルーツを持つ子どもたちのための教育事業

■たぶんかフリースクール

2005年の開設以来、15歳以上で来日し、日本の中

学校に受け入れてもらえない学齢超過の子どもたちが、日本語や教科を勉強できる学び場と居場所としてここで学んでいます。そのほとんどは、日本に定住し将来も地域で日本人と共に生活していく子どもたちで、高校進学を目指しています。この10年間で卒業生は450名を超えています。生徒数は年々増え、2015年度は、63名、10か国（中国、フィリピン、ネパール、タイ、ミャンマー、インド、アメリカ、コンゴ民主共和国、パキスタン、日本）の生徒が学び、62名が高校に進学しました。学齢超過の子どもたちの数少ない学びの場として、都内全域や近県からも通ってきています。最近では、東京都教育相談センターや行政の窓口から紹介されて来校する子どもたちも増えています。子どもたちは日本語のハンディを持ちながらも未来を切り拓いています。

《卒業生の声》

日本に初めて来た時、日本語が全然わかりませんでした。日本の高校に入るために「たぶんかフリースクール」に入りました。たぶんかに来る前にほかの日本語学校で勉強しましたが、日本語はまだ上手ではありませんでした。たぶんかフリースクールの1年間はとても楽しかったです。いろいろな国の友達をつくりました。ほかの国について知らないことも学びました。4月に高校に入ります。新しい生活がこれから始まります。私は夢を持っていますから、高校に入って一生懸命努力しなければなりません。部活動もやってみたいです。自分の学力を伸ばしたいです。日本人と仲良くなりたいです。これから頑張ります。

授業：通年（随時受け入れ）週20時間の授業（年間にして約800時間）

内容：日本語指導と共に高校入試を視野に入れた教科学習（数学・英語など）や作文、面接指導、進路指導などの高校入試サポートを行っています。



たぶんかフリースクール荒川校の授業風景

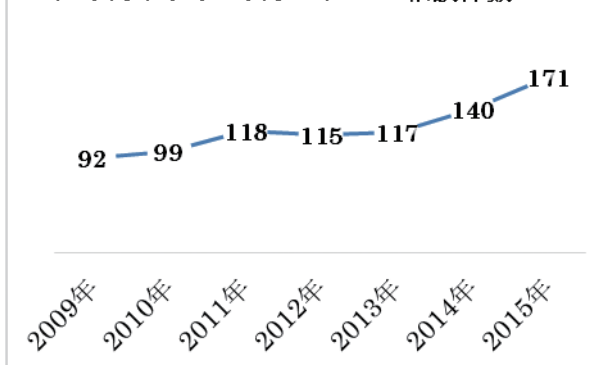


土曜子どもプロジェクト学習風景

■教育・進学相談

定住し、中長期にわたって地域で生活する外国人家族にとっての、子育てや教育、健康などに関する施策は、まだ十分とはいえません。来日した外国にルーツを持つ家族にとって、子どもの教育に関する情報取得は不可欠です。学ぶ場の情報が得られずずっと家にいたり、学ぶ場を求め探し歩いたりしている子どもたちや保護者が多くいます。特に学齢超過の子どもたちは、行政の中に担当部署がないため、たらい回しのような状況になり、長い間学ぶ場が見つからず、家で過ごしているケースがあります。こうした状況の中、「たぶんかフリースクール」への相談件数は増加し、昨年度は170件に上りました。主に電話およびセンターでの面接による相談で、学校教育（高校進学や小中編入）や日本語・教科の指導場所を求めての相談が多く、学齢超過の子どもたちの相談はそのうち6割を占めています。

たぶんかフリースクールへの相談件数



■ボランティアによる土曜日の活動

毎週土曜日には、親子日本語クラスと子どもプロジェクトの活動をボランティアの皆さんが中心となって行っ

ています。子どもたちにとっては、学習支援だけでなく、同じ国の友だちと母語を使って話せる居場所にもなっています。親子日本語クラスでは、子どもたちのルーツや年齢は多様で入学前の子どもから小学校の高学年までにぎやかな声が響いています。また、中学生以上対象の子どもプロジェクトでは、高校に入ったフリースクールの子どもたちも難しい高校の勉強を持ってきて参加しています。そして何より嬉しいことは、卒業生が、サポートする側として後輩達に関わっている姿です。

今後の課題 ～子どもたちが活躍できる社会へ 自治体との連携～

「たぶんかフリースクール」は正規の学校でないため、通学定期も使用できず、健康診断なども受けられていません。2012年から3年間、文科省委託による国際移住機関の「虹の架け橋教室」事業では、学齢超過の子どもたちも、初めて積算対象となり、公的助成を受けることができました。その結果、授業時数を増やし充実した授業を提供することができました。しかし、この助成も2015年2月をもって終了し、2015年度からは、後継事業はあるものの自治体が主体の仕組みに変わったため公的助成は受けられていません。制度の狭間にあって、公的なデータにもカウントされない学齢超過の子どもたちが放置されることなく、継続した学びを保障されるためには、行政の理解と連携が必要です。多言語、多文化、多国籍の多様性あふれる子どもたちが、共に地域で活躍できる多文化共生社会を目指し、多文化共生センター東京は、学びあい、わかりあう場として今後も活動を重ねていきます。